



1972-1978

それぞれのサッカー部



昭和53年秋、35期送別会。(写真1)

優勝の時、 佃先生は優しかった

サッカー部には毎年、けったいな奴が集まるようである。率直な感想であった。入部してみて、同じ学年の顔ぶれを見たからではない。上級生を見たからである。個性的な上級生達。1年生のとき、高校のキャプテンは31期の辻村さんであった。翌年の近畿大会で優勝を飾った学年であるが、秋の送別会の芸を見る限りでは、ちょっとみんな変であった。中学のキャプテンは33期のA田さんであった。寡黙な雰囲気であるが、長い舌が邪魔になるのか話

し方に抑揚がない。掴み所のない先輩であった。その下の34期の連中とはよく遊んでもらった。そーいえば、高校生になってからサッカーの体力は、ヤニパワーで養うものだと考えているウイングのN村さんがいた。途中からサッカー部に入部したS々木さんは僕らを悪の道に引きずり込んだ。そんなとき、34期のキャプテンのY村さんは、「お前ら、そんなことしたら・・・そんなことしたら（しばし沈黙）・・・あかんぞ」。まったく煮えきらないキャプテンであった。

顧問の佃先生は元気であった。よく土曜日の午後の最後のゲームに自ら参加された。ゲーム中ボールを取られる

と、自慢の口笛でゲームを止め、「中途半端なタックルすんな！もっと、ガチッと当たってこい！」と怒鳴る。

（あたるか？後でダッシュ10本とか走らせたりしない？ほんと・・・？）

そんな僕らと34期の先輩でも、昭和50年度近畿高等学校サッカー選手権大会の神戸予選で優勝した。神戸中央球技場の芝生は所々はげていたし、死ぬほど寒かったが、優勝である（写真2参）。この日と送別会の時だけ、佃先生は優しかった。（その後の県予選の成績については詳細は不明）

ほどなく昭和51年度春より、県立芦屋高校を卒業し、日本体育大学サッカ



昭和50年度新人戦神戸市大会優勝。(写真2)

一部を経て、市川雄一先生が赴任された（高校生の頃より兵庫県選抜の主将として活躍されたエリートらしい？）。日体大時代の新しいノウハウを六甲に持ち込んで下さったらしい（写真3参）が、我々の学年では消化しきれなかったようである。

ヒルケルさんもお元気だった。公式戦には、必ず観戦して下さり、応援に来てくれたOB連中とベンチで話すのを何よりも楽しみにされていた。でも、ヒルケルさんの部屋に案内をもって行くと、よく理解できない日本語で、

「◎◇◆■▲▽☆★▼※%@&♂・・・で、・・・♀∞&だから、がんばれお！」

「?????・・・、はい」

我々の学年はそとづらはよかったようだ。

入学したとき十数名いた同級生も卒業の時には、5人になっていた（写真1参、筆者の双子の弟がとび入りで参加しました。前列左はし）。僕らの学

年は本当に上の34期と下の36期に世話になった。チームワークはもとより逞しい生活力と鋭い金銭感覚が六甲学院サッカー部で養われた。

この記念誌の寄稿にあたり、関係諸先輩後輩諸兄に感謝するとともに、在りし日を御回想下されば幸いである。

[関 保二]



昭和51年度冬季三重県遠征。於、伊賀上野（写真3）